

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 30

* 河島英昭とチェーザレ・パヴェーゼ *

堤 康徳

カルヴィーノの未亡人、エステルが今年 6 月末、93 歳で亡くなった。1985 年に急逝したカルヴィーノも存命ならば、10 月で 95 歳になる。作家の死後、その著作の厳格な管理者となったエステルについては、いずれ稿を改めたいと思う。

そのおよそひと月前の 5 月末、イタリア文学者の河島英昭氏(1933-2018)が逝去された。河島訳『ウンガレット全詩集』が、岩波文庫の一巻として刊行されたばかりだった。東京外国語大学在学中に、私は河島先生に教えを受け、カルヴィーノの初期の作品をテーマに卒論を書いたときも、指導していただいた。古典から現代文学までの膨大な訳業で知られる先生は、カルヴィーノの翻訳者であり、カルヴィーノ文学の紹介者でもあった。河島訳によるカルヴィーノの作品には、『まっふたつの子爵』(晶文社、のち岩波文庫)、『宿命の交わる城』(講談社)、『イタリア民話集(上・下)』(岩波文庫)がある。

酒も煙草もたしなまず、まさにイタリア文学に捧げた人生だったといえるのではないだろうか。私は忠実な弟子ではなかったが、その大きな業績を振り返り、この場を借りて師を追悼したいと思う。

1977 年入学の私たちイタリア語学科の新入生に、『解体新書』の翻訳者として知られる杉田玄白の『蘭学事始』を読むように勧められたことがまず思い出される。1978 年から退官まで『神曲』講義を続けられたが、私はその初年度の講義を受け

た。「地獄篇」第一歌の講義でよく覚えているのは、ダンテが最初に使った人称代名詞が一人称複数の所有格 nostra だと指摘されたことだ。ダンテを「見神の叙事詩人」ととらえる視点が、この発言にすでに見られる。



『イタリア・ユダヤ人の風景』と『叙事詩の精神』

70 歳を過ぎてなお精力的に執筆を続けられ、2008 年から 10 年にかけて、ライフワークともいえるべき『パヴェーゼ文学集成』全 6 巻を岩波書店より刊行された。また、同社の月刊誌『図書』に 2005 年からおよそ 10 年にわたり連載された『神曲』新訳は、『地獄篇』『煉獄篇』が完結し、あとはいよいよ『天国篇』を待つばかりとなっていた。

私のいちばんの愛読書は、『イタリア・ユダヤ人の風景』(岩波書店、2004 年)である。お手製の詳しい地図が掲載されたこの一書を携えて、私はヴェネツィアのゲットーや、トリエステの旧ユダヤ人街を歩いたものである。

イタリアのユダヤ系作家やパヴェーゼへの関心の根底には、歴史に翻弄され、迫害された人々の側に身を置こうとする先生の強い意思があると思われる。解放闘争にたおれた人々の手紙を集めた『イタリア抵抗運動の遺書』（河島英昭他訳、富山房、1983年）の翻訳・出版も、同じ信念に根ざす仕事である。それは、先生が戦時中に多感な少年期を過ごし、戦火によって帰るべき家を失ったこととも無縁ではあるまい。

先生はたぐいまれな文章家だった。作家や詩人を論じるとき、先行研究を踏まえて自説を展開するという学術論文のスタイルをとらず、その文章からはとりわけ河島英昭の個性が全面に出る。それゆえ、あまりに一途な文学青年のたたくまいをそこに見出して、とまどう読者もいることだろう。

私がいちいち感心させられるのは、そのみごとな風景描写である。作家ゆかりの土地を描写するさいにとくに筆がさえ、まるで地図帳を一幅の水彩画に仕立てるような趣きがある。たとえば、カルヴィーノが育ったサンレモ一帯の次の一節を読みたい。

リヴィエラ西海岸に属するサン・レーモ市は、フランスとの国境に近く、隣町のヴェンティミリアを少し過ぎれば、すぐその先の海岸に、フランス領のマントンの町影が見える。また、棕櫚の並木が続く温かなサン・レーモ市の海岸から、爪先あがりに街路を登ってゆくと、背後にそびえる階段状の丘は、雪をいただく峻厳な海岸アルプスの尾根へ、そのまま連なってゆく。そしてその最も高い稜線が、伊仏間の国境をなすのだが、これをイタリア側の平地へ下ればパルチザン勢力の中心地の一つとなったクーネオ市へ出る。この谷間一帯はパルチザン兵がドイツ軍とサロ共和国の黒シャツ旅団とを相手に激戦を繰り返した土地である（「カルヴィーノ文学の原点」『叙事詩の精神——パヴェーゼとダンテ』岩波書店、1990年、p. 167）。

パヴェーゼの生まれたピエモンテ州の小さな村、サント・ステーファノ・ベルボにかんする記述を読んでみよう。

地図をひらいても、この村の名はまず記されていないだろう。概略の位置は、アルプスの麓の工業都市トリノとリグーリア地方の港湾都市ジェノヴァとを直線で結んだ、ほぼ中間点である。そのあたりには、数百メートルの高さの丘陵が果てもなく波打って、そのあいだを幅一〇メートルにも充たないベルボ川が縫って流れている。（中略）ベルボ川は丘と丘との狭間の耕地を帯状に潤おして流れ、ポプラやアカシアの林をくぐり、カネツリの町を過ぎ、ニツアを通過して、アレクサンドリア市の手前でターナロ川に注ぎこむ。そして一〇〇メートルに近い川幅のターナロが、ボルミダ川やオルバ川の支流を集めて、やがてトリノからカサーレを経て流れてくるポー川に、合流する（「詩人という仕事Ⅱ——パヴェーゼ流刑地詩篇をめぐって」同書、p. 35）。

河島英昭（以下敬称を省かせていただく）は、チエーザレ・パヴェーゼ（1908-50）の翻訳・研究にひとかたならぬ情熱を傾けた。1980年から81年にかけてトリノに住んだとき、パヴェーゼが自殺した同じホテルの部屋に滞在したことからもそれがわかる。

エйнаウディを拠点に出版活動を行っていたパヴェーゼは、1935年5月トリノで反ファシズム活動を理由に逮捕され、イオニア海を臨むカラブリア州の僻村ブランカレオーネに流刑に処せられた。1935年8月からおよそ7ヶ月に及ぶ流刑地における生活で、パヴェーゼは詩作に没頭した。

『叙事詩の精神——パヴェーゼとダンテ』は河島の主著のひとつである。副題からも明らかのように、この著作の中核をなす論考は、パヴェーゼとダンテをめぐるものだ。パヴェーゼ論においてとりわけ興味深いのは、物語性の色濃い詩篇と、逆にあまりにも詩的な小説を書いたことで知られる彼の文学世界が、著者独自の読解によって明らかにされている点である。河島はまず、流刑地での経験が、パヴェーゼの詩学の大きな転換点となったことに注目する。

流刑は、政治的苦悩と不自由な生活のなかで、パヴェーゼに新しい世界の存在を知らしめ

た。南イタリアの海辺で貧しく原始的に生きる人びとの社会、それこそは、失われた叙事詩の世界だった(「詩人という仕事 I——チェーザレ・パヴェーゼの詩学」p. 53)。

叙事詩の精神は、河島によれば、「イタリア文学の伝統の本質をなすもの」(「後記」p. 308)である。そして叙事詩は、パヴェーゼにおいて、彼の「思考の根幹をなす——ヨーロッパ文学の本流をなすとも言うべき——神話の領域」(「詩人という仕事 II——パヴェーゼ流刑地詩篇をめぐって」p. 127)と重なり合う。ここで詳しく論じる余裕はないが、河島は、パヴェーゼが流刑地において、詩人個人の主観が全面に出る「私詩」から、「神話詩」あるいは「物語・詩」への方向性を明確にしたと考える。さらに、「詩・物語」ともいうべきパヴェーゼの短篇小説群や長篇小説を、この延長線上にとらえようとする(p. 149)。流刑地で作られた詩篇のひとつ「風景」のなかには、「家出」「彷徨」「帰郷」といった、繰り返し現れる「祖型」あるいは「原型」が書きこまれているという(p. 130)。パヴェーゼにとって、流刑地あるいは異郷にあることは、自らの個人的体験を超えた、男の本質をなす「父性」であった。したがって、「家出・彷徨・帰郷」の連環を生き(p. 129)、「悲惨」「飢え」「裏切り」を味わうのは、男の宿命なのである。

もうひとつ、特筆すべき指摘がある。パヴェーゼが、男女の関係、ひいては、死すべき存在である人間どうし関係を、「裏切り」と規定したというのである。「家出・彷徨・帰郷」の連環を生きる男たちの背後には、「裏切った女たち」の存在が感じられるという(p. 129)。ただし「裏切り」については、この論考でこれ以上詳しく扱われることはない。パヴェーゼの小説にかぎっていえば、一般に知られているように、その作品の女性像には実在する「裏切った女」の影が認められる。流刑地ブランカレオーネでの経験をもとに 1938 年から翌年にかけて執筆された長篇第一作『流刑』// *carcere* について、河島自身が、エッセイ集『めぐりくる夏の日』(岩波書店、2007 年)のなかで以下のように述べている。

そして彼自身は語らないが、彼の罪状はもっ

ぱら、名義を貸して受取り人になっていた手紙の、真の受取り人の名前を、黙秘したことであった。獄中の共産党の活動家が、ある女性へ宛てた手紙だったという。

彼女はパヴェーゼの、たぶん一方的な、恋人だったのであろう。反ファシズム活動の理由で、一網打尽にされた二百名近い知識人の中に、彼女も入っていた。そしてもちろん、当局に何もかも彼女は語ったであろう。

加えて、南の果ての流刑地から、パヴェーゼがトリノに戻ってくると、彼女は別の人物と結婚していた。つまり、長篇『流刑』は、二重の意味での、裏切りの物語なのである(pp. 91-92)。

『叙事詩の精神』の詩論に戻ろう。河島は、流刑地で書かれた詩篇から、「《愛》という言葉が慎重に排除されていることに」(p. 133)注意を促したうえで、「十三世紀のダンテ以来、イタリアの文学的伝統において強固に続いてきた《愛》(アモーレ)と鋭く対立する考えを、二十世紀の詩人パヴェーゼが提示した」(p. 132)と述べ、さらにこう続ける。

そしてダンテ以来、連綿と書きつがれた《愛》の詩が、結局は、キリスト教精神に裏打ちされてきた点を思い返すとき、また一九二〇年代から四〇年代にかけて権力を掌握していったファシズムに対して、カトリズムが無力であったばかりか、これを補強する役割を果たしたことを思い返すとき、パヴェーゼが、流刑地にありながら、あるいはファシズムの弾圧下にありながら、どうして《愛》の詩を書きえたであろうか。パヴェーゼが《愛》への批判の詩を書くのは、決して個人的——すなわち私的——理由によるのではないのだ(p. 133)。

挑発的で大胆な仮説といえよう。だがたとえば、イタリア文学の伝統が《愛》であると断定しうるのか、といった問題について、さらなる検討が必要だと思われる。これを、あとに残された私たちイタリア文学研究者の課題としたい。

(上智大学講師)

チャンピオンを作り上げた男

谷口 和久

突出した才能は、ともすれば天からの贈り物か、あるいは自力で地面から芽を出してきたかのように見えがちだが、実際には彼ら・彼女らを発掘し、育てた人たちとの出会いがあってこそ開花したものだろう。

プロデューサーやいわゆる生みの親というのは、ほとんど表舞台に出てくることがないのでその存在を意識することはまれだが、彼らがいなければ、すぐれた才能も埋もれたままであったはずだ。

歌手の安室奈美恵が最近引退したこともあって、これまでのキャリアが紹介された記事をしばしば目にしたが、その中でもとくに印象的だったのは、彼女を発掘した沖縄アクターズスクール校長との出会い話だ。

友達のオーディションに付き添いで来ただけのおとなしい女の子。しかしながら、彼女の持つ「何か」を感じ取った校長のマキノ氏は、すでに家に帰ろうとバス停に立っていた安室奈美恵を追いかけ、スクールに入るよう声をかけたのがデビューのきっかけという。

彼女の持つオーラがマキノ氏の目をひきつけたのだろうが、やはりマキノ氏が見る目を持っていたからこそであろう。

至高のチャンピオン *Campionissimo* ファウスト・コッピを見出し、育てたのは、同郷のピアッジョ・カヴァンナという男であった。ただ、カヴァンナが他の生みの親たちと異なるのは、目が不自由であったということだ。見えない眼でコッピの中に何を発見したというのだろうか？

カヴァンナは、生まれもコッピと同じピエモンテ州ノヴィ・リーグレであり、同郷の初代カンピオニッシモであるコスタンテ・ジラルデンゴもカヴァンナの指導を受けた選手の一人であった。

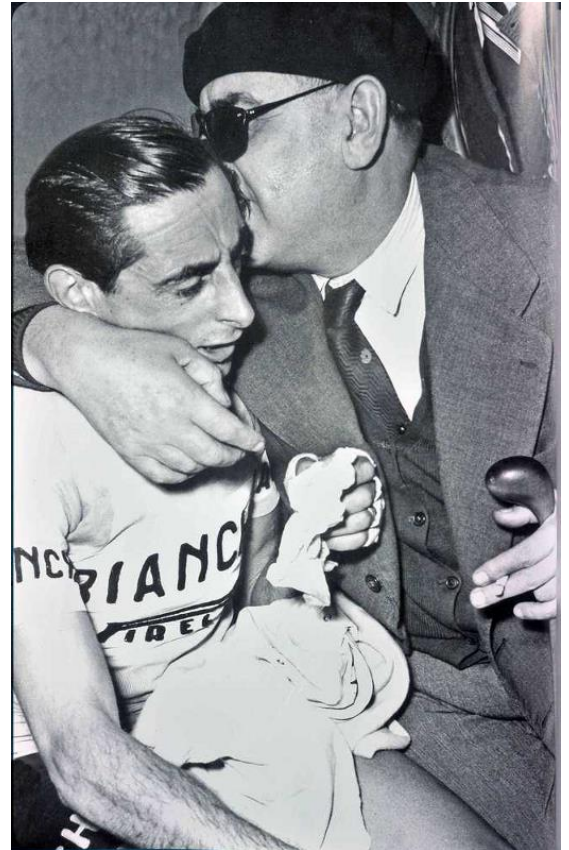
若いころは目も問題なく、ボクシングや自転車競技に打ち込んでいたものの、アクシデント(一説によると塵埃によるもの)で視力を失ってしまう。

しかしながら視力を失った後も自転車競技への情熱は冷めやらず、マッサージャーとして、そして指導者として、イタリア自転車界の発展に寄与していった。

今でこそ日本でもスポーツ・マッサージの有効性が認められて、プロやトップアマなどでも導入されているが、ヨーロッパの自転車競技においては早くからその重要性が認められてきていた。

レース前にはウォーミングアップのために、そしてレース後には疲労回復のために。ことに何日も続けて開催されるステージ・レースでは、疲労回復は最重要課題であり、食事とならんで翌日のレースに備えるために、なくてはならないものだ。

また、普段の練習時にも、より質の高い練習に取り組むため、定期的に行われている。



【コッピを祝福するカヴァンナ】

出典: <http://faustocoppi.altervista.org/biagio-cavanna.html>

マッサージャーは選手たちと日常的に接し、体調なども文字通り手に取るようにわかるためだろう、選手たちにとってはよき相談相手、アドバイザー的な存在だ。実際、マッサージャーの多くは元選手でもあるので、気安い先輩として、直属の上司ともいべき監督やエースにはなかなか言えないようなことも相談できたのではないだろうか。

また、他にもマッサージャーの役割として、レースの前には補給食(パニーノなど)を作ったり、レースが始まれば先回りして選手たちに水やサコッシュ(補給食を入れた袋)を渡したりと、朝早くから夜遅くまで大忙し。黒子的な存在ではあるが、縁の下の力持ちとして、チームになくてはならない存在だ。



【若き日のコッピとカヴァンナ】

出典: <http://www.cyclemagazine.eu/cycle/2013/10/bartali>

-nella-sua-toscana-quant-ricordi/

カヴァンナは「Guru (導師)」と呼ばれたり、「Orbo di Novi (ノヴィの盲人)」と呼ばれたり、当時からカリスマ視されたが、体に触るだけで選手の体調はもちろんのこと、素質や将来性まで見きわめることができたという。

また、当時はまだテレビ中継もなく、レースの展開、すなわち誰がトップで、後続は何分くらいの差で追いかけているのか把握するのは、なかなか難しい状況であったが、カヴァンナはいまコッピがどのあたりを走っているか、どのような状況に置かれているか、たちどころに言い当てることができたという。

いずれも凡人からすると、にわかには信じがた

いことだが、星の王子様のいうように「大切なことは目に見えない」のかもしれない。

カヴァンナの暮らすノヴィ・リーグレには多くの若手が集まり、さながら「カヴァンナ自転車選手養成学校」の様相であった。ただ、カヴァンナ校長の指導はなかなかスパルタンで、練習はもちろんのこと、日常生活にいたるまでかなり厳しく、こと細かに管理・指導された。

大半の選手はコッピの忠実なアシストとなるべく育成された。

「忠実なアシスト」といえば聞こえがよいが、実情は以前のコレンテ 327号(2018年2月号)で紹介したような「Domestique (フランス語で「下僕」の意)」に近かったようだ。

アシストを使ったチーム戦略を自転車レースに導入したのはコッピをもって嚆矢とされるが、その指導役となったのがカヴァンナであった。いくら力のあるアシスト選手であっても、自分勝手な走りをしては、エースの(すなわちチームの)勝利に貢献できない。監督やエースの指示どおりに忠実に働くことがアシストの役割なのである。



【コッピをマッサージするカヴァンナ】

出典: <http://cycling-passion.com/watch-coppi-he-like-binda/>

biagio-cavanna-fausto-coppi/

また、コッピはドーピングにも手を染めていたが(当時は時代的に黙認されていたこともあり、それを隠しもしなかった)、カヴァンナが指南役であったようだ。

当時主流であったドーピングは、アンフェタミンなどの、いわゆる覚せい剤のたぐいであるが、これらは「Bomba（バクダン）」と呼ばれ、登り坂やゴール前など、ここの一番で、疲弊しきった足に「一撃」を与えてくれるものであった。

日常生活を含めた体調管理、レース戦略、そしてドーピング。。。生真面目すぎるストイックさというのは、メビウスの輪のように裏返って、暗黒面に繋がってしまうものなのだろうか。カヴァンナとコッピのペアは、さまざまな功罪や清濁を胸にかかえて、ひたすらに勝利を追い求めていった。

かたやコッピのライバルであるジーノ・バルタリが、レース前にワインを飲んだり、レース後にタバコを吸ったりしていたのとは対称的だ。

コッピはインタビューで、「バルタリみたいな生活を送っていたら、とてもじゃないが走れないよ」と語ったそうだが、「Uomo di Ferro（鉄の男）」と呼ばれたバルタリが野生児的な強さを示したのに対し、コッピは繊細に注意深くレースに臨んだ。

実際、コッピは「自転車に乗っているか、病院のベッドに寝ているか」といわれるほど、しょっちゅう骨折や体調不良に見舞われていた。

ひとつには、幼少時や戦時中（コッピはアフリカに従軍し、戦後は捕虜収容所に入れられていた）の栄養不良により、体調を崩しやすかったり、骨がもろかったりしたといわれている。

しかしながら、常にギリギリの線で、おのれを追い込んでいたことによる部分も大きかったのではないかと思われる。

コッピは 1960 年に、レースのために訪れていたアフリカで感染したマラリアによりわずか 40 歳の命を閉じるのだが、カヴァンナもコッピのあとを追うように、翌 1961 年に亡くなった。

二人で新たな自転車レースの歴史を作り上げ、なによりカヴァンナは「Campionissimo チャンピオンの中のチャンピオン」という作品を作り上げた。その功績は、今後、より評価されるべきであろう。

[参考文献]

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009

John Foot, *Pedalare! Pedalare!*, Bloomsbury, 2012

『自転車ロードレース教書』（砂田弓弦著、アテネ書房、1992）



【コッピとカヴァンナ】

出典：<http://faustocoppi.altervista.org/biagio-cavanna.html>

（当館スタッフ）

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>